

## 1. はじめに

本書は、著者がコミュニティ論をベースに社会変動論、都市高齢社会学、音楽社会学などに関して、四半世紀にわたり試行錯誤しながら情熱を持って探求し、かつ表現し続けてこられた研究成果の結晶を、「社会学的創造力」というキーワードによってまとめられたものである。一読すると、実証重視でかつ理論志向の社会学に対する、著者の“真摯で革新的な態度”が伝わる。このような著書を書評させていただく機会を与えてくださった北海道社会学会編集委員会に心から感謝したい。

では、本書評の流れを述べることから始めたい。まず、最初に本書の全体像として構成と内容を紹介しよう(2.)。具体的には、著者が展開する議論のなかから、いくつかの論点に焦点化して、sociological creativity & imagination——「社会学的創造力」と「社会学的想像力」——が分析や概念装置のなかでどう織り込まれているかを検討していく。次に、社会学を志す者が本書から学ぶべき点に言及する(3.)。最後に、これらから必然的に導き出される疑問点(4.)のいくつかを著者にぶつけてみることで締め括ることとする(5.)。

## 2. 本書の全体像——本書における「創造的研究」の意味づけ

本書は、序章を筆頭に、第一部と第二部から構成されている。序章では、「時代診断の社会変動論」と銘打って、本書のタイトルでもある「社会学的創造力」の概念整理がなされている。著者は、ファンジェの創造性の定義をそのまま「社会学的創造力」にも転用し、「創造することは、既存の要素を新しく組み合わせること」であるとまとめる。この定義のもと、「全称命題はひとまず放棄して、詳細な特称命題探求に禁欲する」ことになる。

第一部では、「現代社会学の理論と方法」が、第二部では、「現代社会学の成果と展望」が述べられていく。第一部は第1章から第6章までで、順に、「共同性の社会学」、「社会学の創造性」、「社会学の実証性」、「社会学の生産性」、「社会調査の方法」、そして「社会学の機能分析」に関して、明快で理論的な議論が展開される。ここには、われわれ若い世代の研究者が学ぶべき点が豊富に勢ぞろいしている。

第二部は第7章から第11章までによって構成され、「都市の社会構造論」、「内発的地域発展と活性化」、「高齢社会と老人医療費の社会的要因」、「子育て共同参画社会」、最後に「都市化の音楽社会学」である。いずれの章でも、著者が長年にわたり現場重視の姿勢で実践されてきた実証調査による研究成果が、想像力に基づく創造性を駆使するかたちで分析されている。これだけに留まらず、「時代診断」を心掛ける著者は、分析結果から必ず何らかの“処方箋”を提出している。

だが、残念なことに、各章の議論において、「社会学的創造力」という言葉が部分的にだが、飾り言葉のように多用されている箇所もある。本書のキーワードともいえるべき「社会学的創造力」の定義に不鮮明なところが見受けられるのだ。つまり、「社会学的」と修飾する意味が説明されていない。これはファンジェの定義を転用したため、「創造力」の定義が一般的になりすぎてしまったからであろう。

さらに、著者がこの資質をご自身の分析のなかでどのように織り込んだかが説明不足な

ために、本書が「社会学的創造力」の結晶であるといえるのかが分かりにくくなっている。これは、非常に残念なことである。

そこで、私は本書における社会学的分析がどのような意味で「創造的社会学研究」といえるのかを、二つほど例を挙げて検討してみたい。

第一は、著者が集合論におけるベン図を使って、新しいコミュニティパラダイムの構築を試みたことである。集合論で常用されるベン図とコミュニティ論とは、一見すると無関係である。だが、著者は「既存の要素」であるこれらを組み合わせて、コミュニティに関する先行研究で見落とされがちだった盲点を鋭く指摘した。これは、決して単なる組み合わせではない。著者がコミュニティ論の発展を目指して考え抜いた結果、想像力が働き創造性が刺激されたのである。このように、「社会学的創造力」は既存の常識内容やパラダイムをビジュアル化することで喚起され得る。「図式化の作業過程において、曖昧なままであった内容が想像力を刺激して鮮明になることはよくある。そこから、創造力への飛躍は困難ではないだろう」、と著者も説明している。要するに、既存のパラダイムを図式で表現してビジュアル化することは、研究者のなかに或る種の“気づき”を創発させる。この意味で、研究者は当然視していたものから解放されて“異化”されるといえよう。

第二は、少子化の経済的負担の説明をフリーライダー論で説明したことである。これはなぜ「創造的研究」であるといえるのであろうか。その根拠は、社会学分野での複雑な現象を見事に説明している概念——例えば、環境問題におけるフリーライダー論、銀行破産過程における予言の自己成就論、信頼構造における囚人のジレンマ論、権力構造におけるパノプティコン論など——を“食欲に当てはめてみる姿勢”にある。新しい組み合わせを試みる“姿勢”こそが、創造力の原動力となる。これは想像力がさほどなくてもできるであろう。だが、強調しておきたいことは、様々な科学的現象説明のなかで、出来るだけ真理や真実に近い概念を、先行研究として豊かに身につけようとする意欲と態度である。これは古典的な先行研究への“同化”ともいえよう。こういった概念は、何も社会学分野の成果に限らない。自然科学でのエントロピー増大の法則や経営学での PM 理論でもよい。現に著者は PM 理論を地域のリーダー分析に応用している。

「社会学的創造力」を駆使して新しい組み合わせを達成したら、次に問題にされることは、組み合わせの根拠作りである。この作業は最も重要であり、論理性や正統性を醸し出して他者へ説得するさいに武器となる。ここで今度は、社会学的想像力が必要とされるのかもしれない。

以上、評者なりの視点で本書が「創造的研究」である根拠を説明してみた。是非、これについて著者のご意見をお聞きしたい。

### 3. 若い世代として学ぶべき点—「社会学的創造力」の前提条件—

では次に、われわれ若い世代の社会学者の卵が「社会学的創造力」を駆使し“金の卵”に成長する上で前提になると思われる点を、以下の三点に集約して紹介してみたい。

第一に、「研究する際の最終的な問いかけは、『何のために、何を、どう、明らかにするか』に絞られる」。これは思考が堂々巡りになったとき特に有効であろう。常に自己に問いかけていく態度こそが「社会学的創造力」の前提条件になろう。第二に、全称命題よりも特称命題に禁欲するという指摘である。なぜなら、「人間行動の予測と説明といっても、たく

さんの限定をつけないと、具体的なところが分からず、特称命題さえ作成できない」からである。特称命題がいくつか出来上がったなら、その要素を前提に「新しい組み合わせ」を達成することを試みて、全称命題の生成へと挑戦していくことである。この点も肝に銘じたい。

第三に挙げられる指摘は、科学的議論のための概念定義に関するものである。すなわち、概念の「定義をせず、データを示さないままにムードで議論することは、非科学的なのである。概念の操作化は議論のための共通土俵を作るうえでも必要である。その概念が何を指し示しているかを特定化しないような議論には、実り豊かな成果は今後とも期待できない」。

本書には、「社会学的創造力」を獲得するための前提になるヒントが、この他にもまだまだ多く散りばめられている。多くのメッセージを受け止めることが「社会学的創造力」への近道であろう。

#### 4. 疑問点をいくつか

ここで、本書に対する疑問点と私見をいくつか述べてみよう。本書のタイトルと大いに関連することだが、著者は、「想像力がなければ、創造力も発揮できないという立場」から、「両者の関係は、想像力が先行して、これを創造力が支えるところにある」と断言する。そこで、第一に、著者が「想像力⇒創造力」と判断される根拠をお教え願いたい。

これに関しての私の考えは次のようになる。両者の関係は、いわば車の両輪であり、「鶏が先か、卵が先か」の関係性と類似していて、どちらが先行するということではない。むしろ、創造力がさらに想像力を掻き立てることもあるだろう。ここで掻き立てられた想像力は、さらなる創造力を促進させる。つまり、「想像力⇔創造力」である。こうして、想像力と創造力はそれ自身が、互いに豊かに太りながら止揚してゆく。

さらに、われわれが想像力を獲得できるか否かについて、著者は「原則としてこれには研究者としての資質が大きく左右する」としか言っていない。われわれ若い世代は、「社会学的創造力」を身につけてこれを遺憾なく発揮し、微力ながらも学問貢献したいと熱望している。だが著者によれば、想像力は個人の天賦としての資質である。われわれ若い世代が知りたい点は、想像力を持ってないでいる者が、どんな訓練を積み重ねればそれを持てるようになるか、である。この欲望を満たすには、これだけでは物足りなさを感じる。そこで、想像力と創造力のダイナミックな関連性についての理論的検討をもう少しだけいただければ、という切なる願いがある。この点を、是非とも第二のリプライとしてお願いしたい。

私見では資質は先天的なものではない。専門的な訓練により獲得可能な、後天的なものである。そこで、想像力を研究者の資質として身につけるためには、研究者自身が“異化”される必要があるのではないか。研究者も生活史を背負った一個人に過ぎない。必ず思い込みや固定観念を持つ。これらを持つことは禁じえないが、少なくとも相対化して自覚していることは大切である。

第三に、内容についての疑問も残る。子育てフリーライダーの議論である。著者は、社会学者の立場から創造的で具体的な提言として、「子育て共同参画社会」を打ち出している。「子育てする男女の負担」を公平にするために、「子どもを産んでも産まなくてもそして産めなくても、次世代の養育費用を応分に負担し合うことを骨子とする」。評者は、この「子育てフリーライダー論」を即、少子化対応策と結びつけることには疑問を感じる。

この処方箋は果たしてわれわれ社会学を志すものが目指すべき“社会学的処方箋”とい

えるのであろうか。これは、経済学者が提出する“経済学的処方箋”ではなかろうか。著者もご指摘のとおり、確かに負担には経済的負担だけでなく、時間的負担と精神的負担もある。これらを「マクロ的」に融合させて、この特称命題を全称命題へと発展させていく試みは、われわれ若い世代に残された課題であろう。もっといえば、たとえ経済学であっても、負担（コスト）のみに焦点化した議論ではなく、“利益（ベネフィット）”をも考慮に入れて、あくまでも両者のバランスを検討するだろう。

著者が掲げる「子育て共同参画社会」には、私も賛成である。しかし、子育てフリーライダーに代表されるような、経済的負担のみに焦点化された処方箋には賛成しかねる。むしろ、著者の表現を借りれば、経済面、時間面、そして精神面それぞれについての負担が存在する。なおかつ負担だけではなく“利益”をも射程に入れたバランスのある議論を展開することが理想であろう。

私も今後は少子化研究に取り組むつもりだが、筆者からのメッセージで受け継ぎたいことがある。それは、社会変動までも見据えた「マクロな視点」を持つことである。だが、私が著者と異なる点は、若いカップルの「産む・産まないの自由」の延長にある「個人の自由」からも、つまり“少子化のミクロ社会学研究”をも出発点にすることを、きわめて重要である点である。なぜなら、自由についての議論は社会学の伝統において、きわめて中心的なテーマの一つであり続けてきたのだから。

ただ、私はこの「個人の自由」レベルの議論に留まらず、これを現代日本社会のエートスとみなし、ここから「社会変動」や「時代精神」を分析するという視角を採用する。この研究テーマは、21世紀に向けて、家族社会学と福祉社会学を志す評者にとっても、無視してはいけない重要なテーマである。そのさい、本書の第10章「子育て共同参画社会」は、社会学的先行研究の草分けとして位置づく。

## 5. 締め括りに

『社会学的創造力』——本書がもし本屋の棚に陳列してあったら、社会学を志す者なら、かなり高い確率でこれを手にとるであろう。きわめて魅力的なタイトルである。著者がC.W.ミルズの『社会学的想像力』を意識してネーミングされたことは、本書の「はじめに」にもあるように想像に難くない。また、日本社会学会編『社会学評論』の記念すべき2000年、200号において、「21世紀への社会学的想像力——新しい共同性と公共性——」と題されたテーマが議論されたことを考えても、著者の学問的なセンスの良さを感じる。本書が、社会学を志す者はもちろんのこと、学部の学生や大学院生、社会学者以外の研究者、実務レベルの専門家、地域のリーダーなど幅広い読者に対して「社会学的創造力」の一端を感じさせてくれることは間違いない。私のような若い世代の研究者は、本書のメッセージをしかと受け止め、発展させていくことが使命の一つになるであろう。

(かたぎり しずこ、鹿児島大学法文学部、家族社会学・福祉社会学)

(katagiri@leh.kagoshima-u.ac.jp)